

# テーマ「地域住民を巻き込んだ演習への取り組み」－地域の中で育てる－

カテゴリー ④連携(地域・多職種等)



▲学院の位置・外観

## 1. 学校概要

- ・学校名:北海道立江差高等看護学院
- ・所在地:北海道檜山郡江差町伏木戸町 483
- ・課程名:3年課程 ・1学年定員数:40名 ・就業年限:3年

## 2. 学校理念

道立看護学院は、北海道の地域医療を担う看護職員の養成を目的として設立された専修学校である。そのなかで本学院は、地域に根ざした看護を実践できる人材を育成し、道内でも看護職員の充足率が低い檜山・渡島・後志・胆振地域の医療・福祉施設等で必要とする質の高い看護職員を供給する役割がある。

## 3. 内容

地域包括ケアシステム構築の推進に向け、看護職員には多様な場において多職種と協働して看護ケアを提供することが期待されている。一方、近年、子どもや高齢者と関わる機会をほとんど持たない学生も多い。さらに当学院は学生数も少なく、学生同士や教員との演習だけでは、対象に応じた尊重姿勢やコミュニケーションについて、十分な学習効果が得られない状況がある。こうした背景を踏まえ、本学学生の看護実践力向上をはかる上で、地域住民の協力を得た演習に積極的に取り組む必要があると考えた。今回、地域に暮らす住民を巻き込んだ演習として、地域住民の方に模擬患者として参加していただいた。その内容と結果について報告する。

▼演習全体の様子



## 4. 演習内容

- 1)科目:フィジカルアセスメント
- 2)対象学生:1年生8名
- 3)模擬患者:4名(70~80歳代)
- 4)教員配置:2名
- 5)時期:1月(基礎看護学実習Ⅰの1週間前)
- 6)目標
  - (1)臨場感のある中で安全・安楽にバイタルサイン測定を実施できる。
  - (2)コミュニケーションの基本に留意し、対象を尊重した姿勢・態度をとることができる。
  - (3)対象の反応を捉えながら援助を実施できる。
- 7)内容(90分1コマ)

最初に説明(10分)を行なう。次に、バイタルサイン測定(体温・脈拍・呼吸・血圧)と生活の様子についての問診(50分)を、模擬患者1名に対し学生2名(実施者と観察者)が交代して実施する。その後、リフレクション(30分)を模擬患者2名、学生4名、教員1名の2グループに分かれて実施する。視点は、①「安全・安楽」、②「コミュニケーション」、③「対象の反応を捉えながら実施する」とした。

フィジカルアセスメント授業評価

あなた自身への授業への取り組み	3.7
教員の授業の進め方について	3.8
授業内容の理解について	3.8
授業の全体について	3.8

4(そう思) 3(まあまあそう思) 2(あまりそう思) 1(そう思) 0(全く思)



▲バイタルサイン測定の場面



▲リフレクションの場面

### 〈リフレクションの主な内容〉

<p>①安全・安楽</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マンシットを巻く際に皮膚が巻き込まれると、痛みを生じる。高齢者は皮膚にたるみが生じやすいため、巻く時は注意する。</li> <li>・緊張してしまうようにできず、失敗すると気持ちを立て直せなかった。そのため、血圧測定時の加圧しすぎや、マンシットの外し忘れ、時間がかかるなど苦痛を与えてしまった。手技の不熟さがあるため、練習が必要である。</li> </ul>	<p>●学生の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の方に協力してもらい、バイタルサイン測定できたのがよかった。</li> <li>・緊張したが、模擬患者さんが優しく声をかけてくれ、すぐにほぐれた。</li> <li>・実習に行く前に体験できたので、この経験を実習に役立てたい。</li> </ul>
<p>②コミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な声かけや体調の確認はできたが、世代が異なることで共通の話題が見つけれず、沈黙が長かった。何を話すか事前に準備する必要があることやコミュニケーションの大切さを実感した。</li> <li>・専門用語は学生同士では伝わるが、対象には伝わらない。わかりやすいよう表現を言い換える必要がある。</li> <li>・正常値ではない時の対応や不安を与えない伝え方に困った。普段の値の把握や、再測定の検討、他に異常がないか確認する必要がある。</li> </ul>	<p>●模擬患者(地域住民)の意見・感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院した時に新人看護師がいたが、その時と変わらなかった。</li> <li>・緊張は伝わってこなかった。</li> <li>・技術だけではなく会話が課題に感じた。話題を提供すると良い。</li> <li>・自信をもって行ったほうが良い。</li> <li>・貴重な経験ができた。</li> <li>・孫のような存在で可愛く、本当に寝たくて欲しいと思った。</li> <li>・もっとたくさんの子が入学し、育ってくれたらと思い、心から応援したいと思った。</li> </ul>
<p>③対象の反応を捉える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・緊張や手技に集中し、表情などの観察ができなかった。測定しながらも観察することを意識する。</li> <li>・初対面の人の表情の読み取りは難しかった。声のトーンでも体調を確認することや、痛みの有無を聞くことも必要である。</li> </ul>	

## 5. 評価

模擬患者という臨場感がある中で演習を行うことを通して、対象を尊重し配慮する姿勢や、対象の想定した反応ではなく、その場の反応に合わせて、どのように関わっていくかを考える機会となった。年齢や生活背景の異なる対象との関わりを通して、学生同士や教員との演習では得られない学びを得る有意義な体験になったと考える。また、実施時期が基礎看護学実習Ⅰの開始前だったため、学生の興味・関心も高く、実習準備として自己課題の明確化にも繋がった。この後に行われた基礎看護学実習Ⅰの授業評価も3.8~4.0と高く、「(実習中)模擬患者の演習があって良かった。なかったら、もっと緊張した。」という声が多かった。本取り組みを通して、初めて対面する患者とのコミュニケーションへの不安軽減になったと考える。

本学院では、ハラスメント再発防止策の一環として地域との連携強化を進めてきたが、今回の演習を通して、地域住民の力を借りながら、地域の中で学生を育てていくことの有用性を改めて実感することとなった。今後も学院と地域住民との繋がりを活かした取り組みを活性化していきたい。

本学院では、ハラスメント再発防止策の一環として地域との連携強化を進めてきたが、今回の演習を通して、地域住民の力を借りながら、地域の中で学生を育てていくことの有用性を改めて実感することとなった。今後も学院と地域住民との繋がりを活かした取り組みを活性化していきたい。